

ハルマゲドン以降の時と場所を考察する

19章

7 歎び、そして喜びにあふれよう。また、[神]に栄光をささげよう。子羊の結婚が到来し、その妻は支度を整えたからである。

8 まさに彼女は、輝く、清い、上等の亜麻布で身を装うことを許された。上等の亜麻布は聖なる者たちの義の行為を表わすのである。

9 そして彼はわたしに言う、「こう書きなさい。子羊の結婚の晩さんに招かれた者たちは幸いである。彼はまたわたしに言う、「これらは神の真実のことである」。

11 また、わたしは天が開かれているのを見た。すると、見よ、白い馬が[いた]。そして、それに乗っている者は忠実また真実ととなえられ、その者は義をもって裁き、また戦う。

12 彼の目は火の炎であり、頭には多くの王冠がある。彼には記された名があるが、彼自身のほかはだれもそれを知らない。

13 そして、彼は血の振り掛かった外衣で身を装っており、そのとなえられる名は神の言葉である。

14 また、天にある軍勢が白い馬に乗って彼の後に従っていたが、彼らは白くて清い上等の亜麻布をまとっていた。

15 そして、彼の口からは鋭くて長い剣が突き出ている。それによって諸国民を討つためである。また彼は、鉄の杖で彼らを牧する。また、全能者なる神の憤りの怒りのぶどう搾り場も踏む。

16 そして、彼の外衣に、実にその股[のところに]、王の王また主の主と書かれた名がある。

17 わたしはまた、ひとりのみ使いが太陽の中に立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ばすすべての鳥に言った、「さあ、来なさい、神の大きな晩さんに集まれ。

18 王たちの肉、軍司令官たちの肉、強い者たちの肉、馬とそれに乗る者たちの肉、そしてすべての者、すなわち自由人ならびに奴隷および小なる者と大なる者の肉を食べるためである」。

19 そしてわたしは、野獣と地の王たちとその軍勢が、馬に乗っている方とその軍勢に対して戦いをするために集まっているのを見た。

20 そして、野獣は捕らえられ、それと共に、[野獣]の前でしるしを行ない、それによって、野獣の印を受けた者とその像に崇拜をささげる者とを惑わした偽預言者も[捕らえられた]。彼らは両方とも生きたまま、硫黄で燃える火の湖に投げ込まれた。

21 しかし、そのほかの者たちは、馬に乗っている者の長い剣で殺された。その[剣]は彼の口から出ているものであった。そして、すべての鳥は、彼らの肉[を食べて]満ち足りた。

20章

1 それからわたしは、ひとりのみ使いが底知れぬ深みのかぎと大きな鎖を手にして天から下って来るのを見た。

2 そして彼は、悪魔またサタンである龍、すなわち初めからの蛇を捕らえて、千年のあいだ縛った。

3 そして彼を底知れぬ深みに投げ込み、[それを]閉じて彼の上から封印し、千年が終わるまでもはや諸国民を惑わすことができないようにした。これら

キリストの到来

子羊の結婚が到来

マタイ 25:6 - 7,13 にある例え話が成就するのはこの時点でしょう。

「真夜中に、『さあ、花婿だ！ 迎えに出なさい』という叫び声が上がりました。そこで、それらの処女はみな起きて、自分のともしびを整えました…それゆえ、ずっと見張っていないさい。あなた方は、その日もその時刻も知らないからです」すでに「大いなるバビロン」も滅び失せ、ハルマゲドン直前の時点です。

キリストの裁き 開始 ハルマゲドン

天にある軍勢が伴う

この「軍勢」とは誰でしょうか。すでに8節で白い上等の亜麻布を装った聖なる者たちについて述べられ、その衣は義の行為を表していると言われている。義の行為を示す衣服、聖なる者はいずれも、元来罪人である人間が信仰によって世を征服して真のクリスチャンとなった人を指す表現です。ハルマゲドンの裁きにキリストに伴うのは、新婚ホヤホヤの花嫁である聖なる者たちです。

このことはユダ 14 - 15 でこのように預言されていました。「アダムから七代目の人エノクも彼らについて預言して言いました。「見よ、エホバはその聖なる巨万の軍を率いて来られた。すべての者に裁きを執行するため、また、すべての不敬虔な者を、不敬虔な仕方で行なったそのすべての不敬虔な行為に関し、そして不敬虔な罪人が[神]に逆らって語ったすべての衝撃的な事柄に関して断罪するためである」。新共同訳ではこうなっています。「見よ、主は数知れない聖なる者たちを引き連れて来られる。」

しかし黙示録では後に従っていると書かれていますが、具体的に何かをするという彼らの行動については何も述べていません。

彼らが裁きに立ち会うのはおそらく、断罪の証人と言うことなのだろうと思います。つまりキリス

トは「忠実、真実と唱えられ」「義を持って裁く」といわれていますが、その生き証人として、同じ罪深い人間の立場にあって信仰を示し得たサンプルであって「無理な要求だ」と言わせる余地のないことを証明できる立場にあると言うことです。それは次のノアに関する記述に通ずるものだと思います。

(ヘブライ 11:7) …「信仰によって、ノアは、…敬虔な恐れを示し、…箱船を建造しました。そして、この[信仰]によって、彼は世を罪に定め、信仰による義の相続人となりました…」

20章

ハルマゲドン直後、サタンが幽閉される

歴史上のクリスチャンと終末(患難期)の殉教者の復活(第1の復活)

のこの後、彼はしばらくのあいだ解き放されるはずである。

4 またわたしは、[数々の]座を見た。それに座している者たちがおり、裁きをする力が彼らに与えられた。実に、イエスについて行なった証しのため、また神について語ったために斧で処刑された者たち、また、野獣もその像をも崇拜せず、額と手に印を受けなかった者たちの魂を見たのである。そして彼らは生き返り、キリストと共に千年のあいだ王として支配した。

5 (残りの死人は千年が終わるまで生き返らなかった。) これは第一の復活である。

6 第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。これらの者に対して第二の死は何の権威も持たず、彼らは神およびキリストの祭司となり、千年のあいだ彼と共に王として支配する。

7 さて、千年が終わると、サタンはすぐにその獄から解き放される。

8 彼は出て行って、地の四隅の諸国民、ゴグとマゴグを惑わし、彼らを戦争のために集めるであろう。それらの者の数は海の砂のようである。9 そして、彼らは地いっぱい広がって進み、聖なる者たちの宿営と愛されている都市を取り囲んだ。しかし、天から火が下って彼らをむさぼり食った。

10 そして、彼らを惑わしていた悪魔は火と硫黄との湖に投げ込まれた。そこは野獣と偽預言者の両方が[すでにいる]ところであった。そして彼らは昼も夜も限りなく永久に責め苦しむのである。

11 またわたしは、大きな白い座とそれに座っておられる方を見た。その方の前から地と天が逃げ去り、それらのための場所は見いだされなかった。

12 そしてわたしは、死んだ者たちが、大なる者も小なる者も、そのみ座の前に立っているのを見た。そして、[数々の]巻き物が開かれた。しかし、別の巻き物が開かれた。それは命の巻き物である。そして、死んだ者たちはそれらの巻き物に書かれている事柄により、その行ないにしたがって裁かれた。

13 そして、海はその中の死者を出し、死とハデスもその中の死者を出し、彼らはそれぞれ自分の行ないにしたがって裁かれた。

14 そして、死とハデスは火の湖に投げ込まれた。火の湖、これは第二の死を表わしている。15 また、だれでも、命の書に書かれていない者は、火の湖に投げ込まれた。

21 章

1 それからわたしは、新しい天と新しい地を見た。以前の天と以前の地は過ぎ去っており、海はもはやない。

2 また、聖なる都市、新しいエルサレムが、天から、神のもとから下って来るのを、そして自分の夫のために飾った花嫁のように支度を整えたのを見た。

3 それと共に、わたしはみ座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ！ 神の天幕が人と共にあり、[神]は彼らと共に住み、彼らはその民となるであろう。そして神みずから彼らと共におられるであろう。

4 また[神]は彼らの目からすべての涙をぬぐい去ってくださり、もはや死はなく、嘆きも叫びも苦痛ももはやない。以前のものは過ぎ去ったのである。

千年が終わる (20 : 7)

すぐにサタン 獄から解き放される

天からの火、サタン 火の湖に投げ込まれる

大きな白い座

地と天が逃げ去った

死んだ者たち (大なる者も小なる者も) がみ座の前に立っている。

これらの人は「海」「死」「ハデス」から出てきた人々。

巻物に従って裁かれる

命の巻物に書かれていない者は火の湖に。

さて、これはいつの事か。舞台はどこか

明らかにこの復活は20:5の述べる「残りの死人」であり、「千年が終わるまで生き返らなかった。」とあるので、この時点は千年の終わった後であり、20:7の「千年が終わると」からずっと続いていることが分かる。

み座の前にいると書かれているが、出てきたのは地からである。天に復活した後、巻物に基づいて裁かれ、命の書にないものは「火の湖」送りとなるのであろうか。もし天であれば、永遠の命に裁かれた者は、ずっと天に住むのであろうか。

他の聖書の記述から考えても明らかに舞台は地上である。

新しい天と新しい地を見る (21 : 1)

さて、これはいつの事か。

当然のことながら「以前の天と地は過ぎ去っている」。これは20:11で「地と天が逃げ去り」と現在形で書かれている事からも、依然、千年が終わった後の話として継続していることが分かる

新しいエルサレムが天から地に下ってくる (21 : 2)

新共同訳では「新しいエルサレムが、・・神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。」となっている。

「下って来る」という表現からヨハネは地上の観点から見ている。

復活した人のうち、命の書に書かれている者の裁きについて具体的な記述がないが、21:1以降の記述は間違いなくそれらの人々の得る祝福についての記述であろう。

まさしく、ここは地上以外の何物でもない。

神みずから人と共に住み、もはや死も他の苦悩も一切ない
20:14ですでに「死」と「ハデス」が第2の死で

5 そして、み座に座っておられる方がこう言われた。「見よ！わたしはすべてのものを新しくする」。また、こう言われる。「書きなさい。これらの言葉は信頼できる真実なものだからである」。

6 そして、その方はわたしに言われた、「事は成った！わたしはアルファでありオメガであり、初めてあり終わりである。だれでも渇いている者に、わたしは命の水の泉から価なしに与える。

7 だれでも征服する者はこれらのものを受け継ぎ、わたしはその神となり、彼はわたしの子となるであろう。

9 そして、最後の七つの災厄を満たした七つの鉢を持つ七人のみ使いの一人が来て、わたしと話してこう言った。「こちらに来なさい。子羊の妻である花嫁をあなたに見せよう」。

10 そうして彼は、霊[の力]のうちにわたしを大きくて高大な山に運んで行き、聖なる都市エルサレムが、天から、神のもとから下って来るのを、

11 そして神の栄光を帯びているのを見せてくれた。その輝きは極めて貴い宝石に似ており、碧玉が水晶のように澄みきって輝いているかのようであった。

12 それには大きくて高大な城壁があり、また十二の門があった。そして、門のところには十二人のみ使いがあり、イスラエルの子らの十二の部族の名が書き込まれていた。

13 東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。

14 その都市の城壁にはまた十二の土台石があり、それには子羊の十二使徒の十二の名があった。

15 ところで、わたしと話していた者は物差しとして黄金の葦を持っていた。都市と門と城壁を測るためであった。

16 その都市は四角であり、その長さは幅と同じである。また彼は葦でその都市を測ったが、一万二千フアロングであった。その長さと同幅と高さは等しい。

22 そして、わたしはその中に神殿を見なかった。全能者なるエホバ神がその神殿であり、子羊もそうだからである。

23 そしてその都市は、太陽や月が照らす必要はない。神の栄光がそれを明るく照らし、そのともしびは子羊だったからである。

22章

また彼は、水晶のように澄みきった、命の水の川をわたしに見せてくれた。それは神と子羊とのみ座から出て、

2 その大通りの中央を流れていた。そして、川のこちら側と向こう側には、月ごとに実を生じ、実を十二回生み出す、命の木が[あった]。そして、その木の葉は諸国民をいやすためのもの[であった]。

3 そして、もはや何ののろいもない。神と子羊とのみ座が[その都市]の中にあり、その奴隷たちは[神]に神聖な奉仕をささげるのである。

4 彼らは[神]の顔を見、そのみ名が彼らの顔にあるであろう。5 また、夜はもうない。それで彼らとはもしびの光を必要とせず、太陽の光も[持た]ない。エホバ神が彼らに光を与えるからである。そして彼らは限りなく永久に王として支配するであろう。

ある「火の湖」に投げ込まれたのでもはや自然死も病死も事故死も有罪の裁きの死刑もない。

もし、21:1以降の記述が千年が終わる前であるとすると、千年が終わった後、天からの火で滅ぼされる人の死も、復活して命の書に記されていない人の死もないはずである。

従って、「死」そのものが滅ぼされるこの記述は間違いなく千年後であり、記述的には「千年が終わると」から、21章に至っても引き続き時間の順を追って記録されていることが分かる。

結局のところ、黙示録には「千年王国」の間のことについては全く何も記述していないということが確認できる。

また神みずから人と共にどこに住むのであろうか。

明らかにこの地上である。

子羊の花嫁を見せよう という誘い

実際に見たものは天から下ってきたエルサレム

そのエルサレムの詳しい描写

神殿はない

当然比喩的な表現と思われるが、新しいエルサレムつまり花嫁、天で千年間王また祭司として仕えた彼らは、神と子羊と共に地に下って来ることになっている。神殿がもはや必要ではないのは、新しいエルサレム自体が神の住まいであり、中庭も聖所もない至聖所の実体がそこに存在するからです。

極めて簡潔に書かれている記述の中で（千年間については何も触れられていない）このエルサレムについては、妙に詳しく描かれている。これほど詳細な情報を知ることにはどれほどの意味があるのか分からないが、幕屋や神殿を連想させる記述であることから考えられるのは、神殿はそもそも神に近づくための取り決めを物理的に構築したものであり、天に王国（花嫁、エルサレム）が完成すればそれで終わりというものではなく、最終的に地に下って来て全ての計画が完成するというものようです。

そう言うわけで、「事は成った！私はアルファでありオメガであり、初めてあり終わりである」という宣言がなされているのでしよう。

また新しいエルサレムは千年間で終わりかと思ったらそうではなく、「限りなく永久に王として支配する」ことになっているのです。